おひなさま

〈劇あそび〉

堀合文子

幼児の遊びをみていると、劇あそびの材料が沢山みられる。

従来の劇あそびは、脚本があって、それにより、劇あそびを進めた。結局幼児を役者にしていたのである。幼児は役者ではない。幼児の劇あそびは幼児の生活の中にあり、幼児の遊びの一つである。したがって劇の練習も必要とせず、又人にみせるものでない。幼児自身が楽しんでいればそれでよい。

このような劇あそびは、幼児と共に作りあげなければならない。脚本から取材しても、幼児の生活から取材しても、幼児の遊びの中から取材しても、幼児の談話から取材しても、何れにしても幼児と共に進め、幼児と共にたのしみたいものです。（このくわしい事は去年八月号に村井先生の説明があります）

三月三日のひなまつりは男の子も、女の子も、あの優美なおひなさまを飾り、たのしく遊ぶのは、幼い時のたのしい思出の一つになるものです。

ひなまつりが近づくと、一二週前よりひなまつりの主題に入るわけで、話合つつ、おひなさま、びょうぶ、あられ入等々作りはじめます。街でも早くからひなまつりの品々が取揃えられており、子どもたちも心まちに待っておりますが、私共は子どもたちがより以上興味が沸いて又よりよく理解し観察できるべく種々な点、種々な方面で環境を作り、主題をすすめてゆく事はよく御承知の事だと思います。

その一つとしてリズム遊びに、おひなさまごっこをして遊びました。はじめはおひなさまの自由表現から入り、分れて、おひなさまを飾ったり、それぞれのおひなさまが音楽にあわせて表現したりして、後で簡単なリズム遊びに発展していったのですが、子どもたちは、段の上の優美なおひなさまになる事はうれしいらしく、子どもたちが段の上のおひなさまにみる夢を満足させ、子どもたちから、

こうたら、ああしたらの注文がでるようになりました。結局、この劇あそびは此処より取材され発展したので、筋も簡単なものです。

（劇あそび集参照）飾る人をおかあさんにきめたり、おひなさまがよろこんでそれぞれ踊ったり、夜中にねずみが出てきて、おひなさまをおどろかす所、お父さんが帰ってきておひなさまをみるそして皆でたのしく遊ぶ等は、私が復案を持っていて、リズム遊びから話合いながら筋を作り上げました。

リズム遊びとして充分にたのしんで、それを劇あそびの形に整えたわけで、劇あそびへは他の脚本からよりはすぐ入れたわけだが、リズム遊びのところから一度考えてみましょう。

○組全体が二人組んで、親王様、お姫様になり曲にあわせて表現しながら歩く。

○組全体が三人組んで三人官女になり曲にあわせて表現しながら歩く。

○組全体が五人組んで五人囃になり、曲にあわせて表現しながら歩く。

○組全体が三人組んで仕丁になり曲にあわせて表現しながら歩く。

○組全体が二人組み随身になり曲にあわせて表現しながら歩く。

○組全体が、日本人形でもキューピーでも、西洋人形でも各自好きな人形になり曲にあわせて表現しながら歩く。

この時の曲はおひなさまの方は〃ひなまつり〃（エホン唱歌）を使い、お人形の時は〃玩具のマーチ〃を使う。

○次に各自好きなものに分れ曲にあわせ自由に表現する。私の組は年長だったのでその人数は自分達で自然を考えたり友達同志考えていたが、年少だと内裏様が幾組もできたり、五人囃が七人になるかもしれないが、はじめはそれでやって後で話合って人数を知らせる必要がある。交替してする。この時の曲は、内裏様三人官女は〃ひなまつり〃。五人囃は〃ものまね〃（文部省の幼稚園児のための指導書音楽リズム）。仕丁は〃いっしょに仲よく〃（前と同じ）随身は私の即興。人形は〃玩具のマーチ〃。

○次はおかあさん、ねずみ三人、おとうさん、花子と太郎をこの他に加え、曲にあわせて表現する。曲だけで筋をすすめてゆくので、その間のつなぎは私が話をはさんだ。例えば、「おひなさまたちは戸棚の中に去年からずーっとしまわれていましたが、明日はおひなまつりなので、おかあさんは花子や太郎とおひなさまを飾りだしました。」と話して曲を弾く。子どもたちは自由に飾る。このようにして私が言葉をはさみ、このリズム遊びをすすめてゆきました。繰返す度に役は交替しました。

○リズム遊びでは何かものたりなさが出てきて、子どもたちはやりながら「あ、いたい」とか「がりがり」とか自然と口ずさんでいるので、私はそれを取上げ、皆と話合った。

「今ねずみがこんな事をいったり、おひな

さまがこんな事をいった」と持かけて子どもたちとおかあさんは、おとうさんは、と話す言葉を話合う。別にこれでせりふを決めてしまうのでなく、種々と言葉を話合ってこういう風にも、ああいうふうにも言えると話合うだけで、次の段階となるわけです。

○それぞれの役は自由にその場で好きなように話を入れてする。その言葉はその役の人にまかせる。その人によって言えない人、わからなくなった人には、私が助けてあげる。

○一応種々と各自が経験したので自分の役というものを決める。自分のすきな役に決めるわけで何人にもなって困る時はジャンケンなり、くじ引で解決する。

○役がきまったら自分のお面を作る。表現する時もそうだが、おひなさまの観察という面でもよき材料となり、子どもたちの観察の細かさにおどろかされた程で、あれがなくてはと、簡単にすまそうとしても、すまされない位うながされてしまいました。年少組だったらお面の輪廓は先生の方でかき色をぬらせるなど考えたらよいと思います。

○小道具を話して作ったり揃えたりする。小道具は子どもたちにはむずかしい時は手伝わせる程度で、先生の方で揃えてあげてよい。

子どもたちは役が決りお面もできるとそのものになり、表現だの、言葉など熱心に考えてくれて、友だちのまで批評し教えてくれる人もでてくるようになってきたので、私は私の受持である、演出効果をあげる音楽を種々とプロローグに入れたり、音楽を流したりといふ効果も考えたり、又曲を探さねばならなく、子どもたちに刺戟された子どもたちの熱心さに引づられた形になってしまいました。子どもたちと先生と一体になった形で私はうれしく、たのしかった。勿論子どもたちもたのしそうに、劇そのものをたのしんでいました。

子どもたちの生活の中より取材した一例ですが、子どもたちの遊びを一番よく知っている私共が子どもたちと共に作り上げてゆく劇こそ、子どもも先生もたのしいものです。脚本などいりません。子どもたちの中にとびこみ、子どもたちの生活や遊びから劇あそびを見出してはいかがでしょう。たくさんそこここにころがっています。私共が小さな小さな劇作家になるのです。

（お茶の水大附属幼稚園）

× × ×

× ×